

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 柳澤田実

柳澤さんの研究は論文題目「神を欲望すること ニュッサのグレゴリオスにおけるパトス概念の可能性」に示されているように、四世紀のギリシア教父ニュッサのグレゴリオスにおけるパトス・欲望概念の分析を通して神認識論を考察することにある。その場合、グレゴリオス自身がヘブライ・キリスト教と、プラトニズムを主流とするギリシア思想という二つの異文化の出会いを、新たな思想・文化に止揚した一つのパラダイムと成っている。そうである以上、本研究は今日まで欧米さらには欧米文化の影響下にある日本にとって根源的な巨大な異文化の邂逅に関する稀有な比較研究となっていると言えよう。

本論文の結構は四章構成で各章は二節構成である。序では如上の研究目的とギリシア語テキスト解釈の方法論を述べ、読者の便宜のためパトスが有つ四つの意味（可変性、死を含む身体的蒙り、諸感情などを含む魂の蒙り、悪しき情念）が予示される。それを踏まえて、第一章の主旨では、無限な神が有限な人間の認識を不断に超出し続けるゆえ、その認識論的限界の拓開の可能性はパトスに拠ると言う。というのも、パトスは *pathein*（他者から蒙る）という原義に由来し、他者（例えば神）からの誘発という人間の根源的受動性を意味する。そこに神を欲望することは人間存在の無限前進（*エペクタシス*）と成る。続く第二章では、人間の欲望を無限に誘発する神が美とされ、その美の誘発を感受する人間存在の感受性が身心合一的靈的感覚として示される。さらにその美が一般的快・感覚的美醜を超えたイエスの受難（神のパトス）として理解され、従って靈的感覚は他者の死を美として感受する。そこに神人イエスの受難に応える人間のパトス、すなわちシュンパテイア（共苦）が成立する。第三章に到るとこの人間のシュンパテイアが、人間に受肉した神イエスの死に対して「喪」を嘗み続ける愛として示され、このイエスへの喪的愛の参与が、人間の諸他の情念（パトス）的欲求からの浄化（*カタルシス*）であり、不受動心（*アパテイア*）の徳を形成することが考察される。そこにイエスを媒介にした無限の超越者・神との関わりが友愛として成立する。さて第四章では、イエスの受難が自分とは別な他者でなく、自分自身を犠牲として捧げるという犠牲であり、人間が喪を通してイエスの受難に参与することはこの犠牲に参与すること、愛には自己犠牲を伴うことが明らかにされる。こうして一般的な感覚美への欲望は、ここで自己犠牲的受難の美への愛として倫理的次元へ転位するわけである。

以上のような論述を通して通常日本人の思考にとって疎遠な「神への欲望」という形而上学的テーマが、欲望（パトス）の丁寧な分析によって倫理的美学的な他者問題として解釈学的に転位されている。その解釈がギリシア思想とヘブライ的思想との困難な比較研究を通じ、さらにギリシア語テキストに対する綿密な分析を通じなされている営為は、柳澤さんの本論文が有つ卓越した第一の特徴を成すと思われる。

次に本論文がもたらした新しい思想的文化的知見を第二の特徴として、存在論、認識論、美学、人間論、倫理上の諸点に分けて挙示した。

存在論的視点で柳澤さんは「神の降下」に着眼し、絶対的不動的存在観に対してヘブライ的な動的で自己超出的存在（例えば受肉）をまず剔抉する。それはギリシア的な本性（*physis*）に可变的性格を導入することであり、それは従来可変性や女性性の原理とされて無視されてきた質料

概念を活性化し、変化・変容の視点を強調することに連動している。そうすると種的不変の原理である規定的形相性よりも変化を誘発し続ける「無限」概念が質料と共に存在論の中枢に用いられることになる。一見抽象的と見える以上の存在論的な新視点は以下で重大な諸帰結を生み出す。

認識論的視点では、無限は対象化できない以上、神的存在に対しては視覚的知覚や知性的対象認識よりも、意志的エロスのアガペー的な広義の「欲望」が強調されることになる。それは同時にギリシア的視覚文化よりもヘブライ的な音声的聴覚的文化の性格を際立たす認識論的転位を促す。

如上の認識論と人間論をからめて語れば、質料の強調が人間の身体性の尊重をもたらす以上、神的存在や精神的存在の感受における身心融合的な認識「靈的感覺」という地平がここに拓かれる。従来の身体的感覚対知性・理性という対比図式がここに崩れて、他者認識は今や全的人間の実存に拠ることになる。これを美学的視点からすると、調和や適合というロゴス的なギリシア美学のカテゴリーに対して、受難（パトス）の美学が先述のように倫理性を伴って成立するわけであるが、その美学を支えるのは「靈的感覺」なわけである。

倫理的視点からすると「神を欲望する」といういわば超越論的で神秘主義的なテーマは、如上の受難の神・自己犠牲の美に対する愛・シュンパテイア（共苦）という欲望の転換を経て、他者との関係構築という倫理的地平を披いてくる。その倫理的地平では、死や喪の価値が新しく浮彫りにされ、死者への喪の持続が他者を犠牲にしない自己犠牲という倫理の源泉として語られるのである。それは、他者を自分のために犠牲にする権力に対する告発でありかつ変革的倫理となる。

以上のように柳澤さんは、ギリシア思想や西欧思想一般に対してヘブライ・キリスト教を血肉としたグレゴリオスの思想的文化的な拓けを独創的に示したと言える。

このように倫理的共存を、神という超越的無限存在から引き出す本論文は、倫理的宗教的文化的対立抗争の中で混乱した倫理に対して新しい倫理の実験とも呼べる内容を有つ。

以上のような独創的知見にあふれた本論文の審査において諸審査員から次のような質問と研究上の意見が寄せられた。

第一に、論文後半に強調される、死すべき神を美と感受し彼の喪に服するという極限的二者関係（美学）と論文前半で強調される他者の複数性（倫理学）が簡単につながらないこと、これはE・レヴィナスにおける顔と「わたし」との局所的関係と第三者を加えた正義の協働態とが簡単につながらない程問題性を秘めていること、それが今後の大きな研究課題になると指摘された。

第二にパトスが前提となっているが、それは人間生来の能力なのか、あるいは外部から人間の生に与えられる贈与ないし衝撃なのかとの問いがつけつけられ、さらにパトスと陶冶との関係が問われた。第三に新プラトン主義やグノーシス主義ではパトスが克服されるべきものであるのに対し、グレゴリオスにあっては神認識論の中に情念論的身体論的タームが積極的に活用され、当時の知の体系を転換していると指摘され、この問題性の今日的深化が勧められた。それに関連して歴史的な身体性の考察および研究の必要性も指摘された。最後に喪と共に誕生も同時に考慮されるべきだとの指摘があった。

以上の諸意見や問題性の指摘にも拘らず、審査員一同は本論文全体の独創性やテーマの深い考察および前例をみない思想史文化史上の問題提起などに関して全き意見の一致を見た。

したがって、本審査委員会は柳澤さんに博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。